

OU

SAKA UNIVERSITY

MINOH CAMPUS MASTER PLAN 2018

大阪大学 箕面新キャンパスマスタープラン



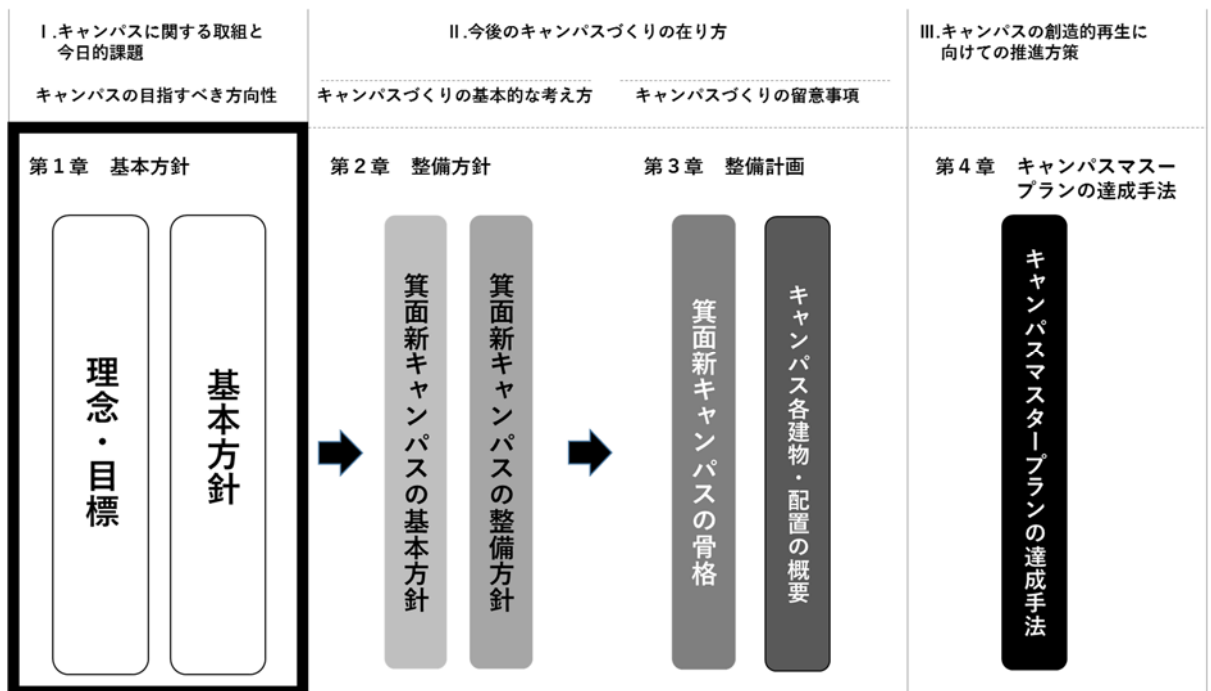
目 次

第1章 キャンパスマスタープランの基本方針	1
1-1. 大阪大学の理念・目標.....	2
1-2. 大阪大学の基本方針.....	6
第2章 箕面新キャンパスの整備・活用方針	9
2-1. 箕面新キャンパスの概要.....	10
2-2. 箕面新キャンパスと周辺街区等の概況.....	11
2-3. 整備方針.....	13
2-3-1. 箕面新キャンパスの個性と空間像.....	13
2-3-2. 箕面新キャンパスの整備方針.....	13
2-4. 多様な整備手法の活用と施設の有効活用.....	17
第3章 箕面新キャンパスの整備手法	19
3-1. 箕面新キャンパスの骨格の形成.....	20
3-1-1. ゾーニング等の空間構成.....	20
3-1-2. パブリックスペース計画.....	21
3-1-3. 交通と動線の考え方（関連；2-2）.....	22
3-1-4. 景観の形成および建物等の配置関係.....	23
3-1-5. 持続可能性の視点からのインフラストラクチャーに対する考え方.....	24
3-2. 箕面新キャンパスの各棟の整備.....	26
第4章 キャンパスマスタープランの達成手法	27
4-1. キャンパスマスタープランの達成に向けた方策.....	28
4-1-1. キャンパス整備の対象と経費.....	28
4-1-2. キャンパスマスタープランの達成手法.....	29
4-2. キャンパスマスタープランの達成のプロセスと要点.....	30
4-3. キャンパスマスタープランの発展的マネジメント.....	31

第1章 キャンパスマスタープランの基本方針

箕面新キャンパスマスタープランは、大阪大学憲章を達成するため、第3期中期目標・中期計画、「OU（Osaka University）ビジョン 2021」など大阪大学のアカデミックプランに沿いながら、これらの課題解決への道筋を示すため、学内で合意形成されたものである。

第1章ではマスタープランの上位概念であるアカデミックプランとの関係を明確化し、施設整備の基本方針を示す。



1-1.大阪大学の理念・目標

大阪大学は、2004年4月より国立大学から国立大学法人へと組織形態を改め、大阪大学の基本理念として大阪大学憲章を宣言し新たな出発を迎えた。

大阪大学憲章

平成15年3月

大阪大学は、開学以来の国立大学という組織を離れて、国立大学法人として新たに出発する。かねて大阪の地に根づいていた懐徳堂・適塾以来の市民精神を受け継ぎつつ、「地域に生き世界に伸びる」ことをモットーとして、それぞれの時代の社会の課題に応じてきた。歴史の大きな転換点をむかえつつあるいま、大阪大学が国立大学法人として新たな出発をするこの機に臨み、将来の豊かな発展を期して、あらためて自らの基本理念を以下のとおり宣言し、大阪大学の全構成員の指針とする。

1. 世界水準の研究の遂行

大阪大学は、人間そのものや人間が構成する様々な社会、及びそれを取り巻く環境や自然のあらゆる分野について、また、それら相互の関係について、その真理を探求し、世界最先端の学術研究の場となることをめざす。

2. 高度な教育の推進

大阪大学は、次代の社会を支え、人類の理想の実現をはかる有能な人材に社会に輩出することを、その目標とする。

3. 社会への貢献

大阪大学は、教育研究活動を通じて、「地域に生き世界に伸びる」をモットーとして、社会の安寧と福祉、世界平和、人類と自然環境の調和に貢献する。

4. 学問の独立性と市民性

大阪大学は、教育研究の両面において、懐徳堂・適塾以来の自由で闊達な市民的性格と批判精神やその市民性を継承し、発展させる。学問の本質を踏まえ、いかなる権力にも権威にもおもねることなく、自主独立の気概のもとに展開する。

5. 基礎的研究の尊重

大阪大学は、すべての分野において基礎的・理論的な研究を重視し、世界水準の研究を自らの課題として、次世代においても研究のリーダーであることを標榜する。

6. 実学の重視

大阪大学は、実学の伝統を生かし、基礎と応用のバランスに配慮して、現実社会の要請に応える教育研究を実践する。

7. 総合性の強化

大阪大学は、総合大学としての特色を追求する。たんなる部局の集合体ではなく、人文科学・社会科学・自然科学・生命科学など、あらゆる学問分野の相互補完性を重視するとともに、新時代に適合する分野融合型の教育研究を推進する。

8. 改革の伝統の継承

大阪大学は、つねに世界に先駆けて新たな学問分野を切り拓き、それに見合った教育研究組織を生み出してきた自己革新の伝統を継承し、絶えざる組織の点検・再編に努める。

9. 人権の擁護

大阪大学は、その活動のあらゆる側面において、人種、民族、宗教、信条、貧富、社会的身分、性別、障がいの有無などに関するすべての差別を排し、基本的人権を擁護する。

10. 対話の促進

大阪大学は、あらゆる意味での対話を重んじ、教職員および学生は、それぞれの立場から、また、その立場を超えて、互いに相手を尊重する。

11. 自律性の堅持

大阪大学は、直面する課題に対し、構成員間の協調をとおして、自らの意思においてその解決を図る。

その後、大阪大学憲章のもとに第1期（2004年）4月～2010年3月・第2期（2010年4月～2016年3月）の中期計画・中期目標を達成しながら、2016年4月には第3期の中期目標・中期計画期間を迎えている。

以下に第3期中期目標前文を抜粋する。

世界には、民族、宗教、言語、制度、習慣などの多様性が存在する。この多様性は、革新的なイノベーションの創出や心豊かな人類社会の営みにとって不可欠である一方で、時として、グローバル社会の健全な発展にとっての障壁にもなりうる。21世紀の人類は、こうした様々な要因が複雑に絡み合って噴出する社会的問題を解決するとともに、最先端の科学や技術開発がもたらす恩恵等を通して、人間性豊かな社会を構築しなければならない。そして、それを成し遂げるためには、学問の府である大学が、学問を介して多様な知の協奏と共創の場になることが必須である。未来を切り拓く原動力はここから生まれる。こうした背景を踏まえ、大阪大学は、その源流である懐徳堂と適塾の精神を継承し、大阪・関西の地から世界に開かれ、世界に貢献する大学として、世界各地より集まる優れた頭脳と才能が互いに切磋琢磨し、その潜在力を最大限に引き出しうる充実した教育研究環境を提供する。新たに構築する教育研究プラットフォームでは、異分野融合による新学術領域の創成や専門分野を超えた能動的な知の統合学修を通じて、様々な要因が複雑に絡み合っている地球規模の社会的問題を独創的なアプローチで解決するとともに、最先端の科学や技術の発展を推進し、人間性豊かな社会の創造に大きく貢献する人材を輩出する。その結果として、グローバル社会の期待に応える世界屈指の研究型総合大学への進化を目指す。

大阪大学は、学問の真髄を極める高いレベルの教育研究を追求するとともに、学問を介して、知識、技能、経験、立場などの多様性を有する人々の相互理解と協働によるコラボレーティブ・イノベーションを推進する。また、「地域に生き世界に伸びる」をモットーとする本学は、国立大学法人としての社会的な責任を自覚し、さらに大阪の市民の力によって生まれた創建の経緯を踏まえつつ、国内外の市民や行政、経済、産業界などの幅広いパートナーと手を携え、社会とともに歩む大学でありたい。さらに本学は、持続的に発展し活力ある社会を創出するための変革を担う人材の育成や新たな価値の創成といった、グローバル社会が求める負託に応えていくものである。

（第3期中期目標より抜粋）

また大阪大学創立 90 周年、かつ第 3 期中期目標期間の最終年度となる 2021 年を見据えた、向こう 6 年間のビジョンである OU ビジョン 2021 を示している。これは、Openness(開放性)をキーワードとする次の 5 つの柱から構成される。

1. Open Education

未来を切り拓く「知の探検者」を育成するために、大学と社会のもつ教育力と交差させ、産官のみならず広く市民社会と協奏し、公共性を備えた知を生み出す「オープンエデュケーション」を実現

2. Open Research

研究者のときめきと自由な発想による学術研究を基軸とし、専門分野を超え、広く世界と協働する新たな知の創出を目指す「オープンリサーチ」を推進

3. Open Innovation

「産学連携から産学共創へ」をコンセプトに掲げ、社会のニーズに基づく基礎研究の課題を発掘し、新たな社会的価値の創出につながる「オープンイノベーション」に挑戦

4. Open Community

「地域に生き世界に伸びる」をモットーに、学術・文化・芸術・医療の拠点として、地域社会やグローバル社会が抱える諸課題の解決や社会の心豊かな発展につながる貢献を目指し、多様な知と人材が交差する「オープンコミュニティ」を実現

5. Open Governance

たゆまぬ自己変革のもとで社会の負託に応えるために、構成員一人ひとりの可能性を最大限に引き出し、安定的で健全な大学経営を行うとともに、リーダーシップと合意形成のバランスを重視した透明性のある「オープンガバナンス」を実践

(OU ビジョン 2021 より抜粋)

国の第 5 期 科学技術基本計画（2016 年～2020 年）では、国内外の様々な課題が増大し複雑化する中で、ICT の進化等による大変革の時代の到来を踏まえてイノベーションの推進をはかっていくこと、世界に先駆けた「超スマート社会」(Society5.0)を目指していくべきことが述べられている。本学はキャンパスのスマート化を進めながら、これらを牽引していく。

一方で、我が国は急激な少子・高齢化を迎え、大学については、世界的にも省エネ・省資源に止まらない広義のサステナビリティが論じられており、こうしたことは 2016 年 4 月から始まる第 4 次国立大学法人等施設整備 5 ヶ年計画にも、如実に反映されている。また、2015 年 6 月には、国立大学の「知の創出機能」を最大化させていくための改革の方向性として、「国立大学経営力戦略」が策定された。これらは大学に、防災や経営力も含めたサステナビリティと、老朽化や財政状況に対応できるマネジメント力の強化を求めていると言える（図 1.01）。

学内の状況に目を向けると、『キャンパスマスタープラン 2012 年部分改訂版』までで示した「リーディングプロジェクト」は、予算規模の特に大きいもの等を除けば、実現可能なものはほぼ実現し、今後は多様な財源を用いた整備手法、予算獲得の具体手法そのものをふまえた計画が求められると考えられる。一方で豊中・吹田キャンパスでは、老朽化や部分的には建て詰まりが進行し、長期的な大規模な建て替え更新の可能性を考えておく必要があること、附属病

院の老朽対策更新計画にどのように対応していくのか、これらを組み込んでいく必要がある。

また、2017年には全学のスペース等（建物・土地・設備）の有効活用の方針が決定された。

さらに、箕面キャンパスについては2007年の大阪外国語大学と大阪大学の統合以来、施設と学生数の不均衡など様々な問題が指摘されてきたが、2015年6月に大阪大学と箕面市が箕面キャンパス移転に関する覚書を交し、延伸される北大阪急行電鉄の箕面船場阪大前駅前に移転する方向で2016年4月に正式合意を締結した。移転後の新キャンパスは、2021年4月の開学を予定している。

本学のキャンパスマスタープランの次期改訂において、箕面キャンパスについてはその中に統合する予定としているが、この箕面新キャンパスマスタープランは、それに先立ち定めるものである。

1-2.大阪大学の基本方針

1-1 で述べた本学の理念・目標を踏まえ、施設整備・活用に関する戦略として OU ビジョン 2021 に沿って以下の基本方針を定める。

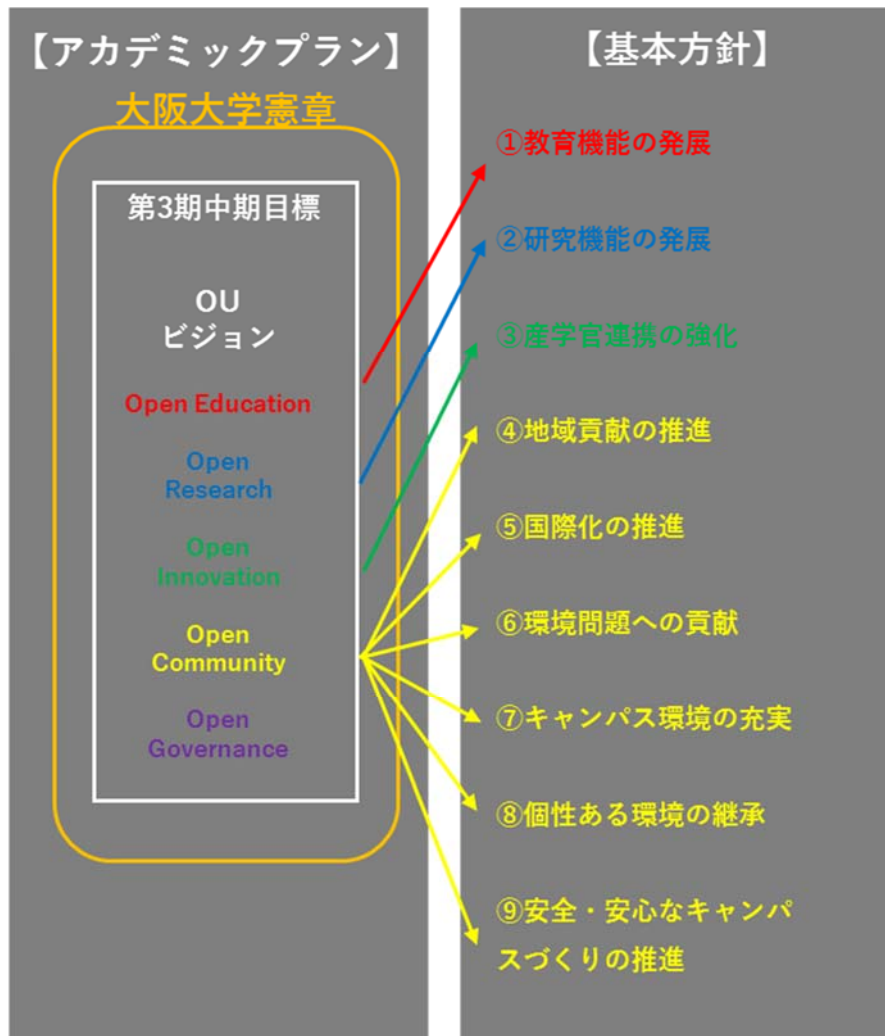


図 1-2-a 大阪大学のアカデミックプランと箕面新キャンパスマスタープランの基本方針との関係性

〈基本方針〉

① 教育機能の発展

大学と社会のもつ教育力を交差させ、産官のみならず広く市民社会と協奏し、公共性を備えた知を生み出す為のキャンパスづくりを行う。そのために、必要な静謐性等の基盤となる環境を確保しながら多様な方法を誘発するコモンのスペースやアクティブラーニング等のオープンな空間を整備する。

② 研究機能の発展

研究者のときめきと自由な発想による学術研究を基軸とし、専門分野を超え、広く世界と協働する新たな知の創出を推進するキャンパスづくりを行う。その中で、研究者の

共用スペースや、若手研究者の研究スペースの確保を行う。

③ 産学官連携の強化

社会のニーズに基づく基礎研究の課題を発掘し、新たな社会的価値の創出につながるキャンパスづくりを行う。とくに、先端的な設備を備えた共同利用・共同研究拠点のさらなる強化を図り、研究力および技術開発力において世界を牽引しつつ、組織の壁を越えた幅広い共同利用・共同研究を推進する。

④ 地域貢献の推進

学術・文化・芸術・医療の拠点として、地域社会が抱える諸課題の解決や社会の心豊かな発展につながる貢献を目指し、多様な知と人材が交差するキャンパスづくりを行う。

⑤ 国際化の推進

グローバル社会が抱える諸課題の解決や国際交流に貢献できるキャンパスづくりを行い、学生や教職員がグローバル社会でその真価を最大限に開花できる環境を創出する。

⑥ 環境問題への貢献

省エネ・低炭素化、生物多様性など、環境負荷低減に配慮したキャンパスづくりを行う。

⑦ キャンパス環境の充実

すべての学生・教職員が充実したキャンパスライフを展開できる環境づくり、およびアクセシビリティの高い交通環境と情報環境づくりを行う。

⑧ 個性ある環境の継承

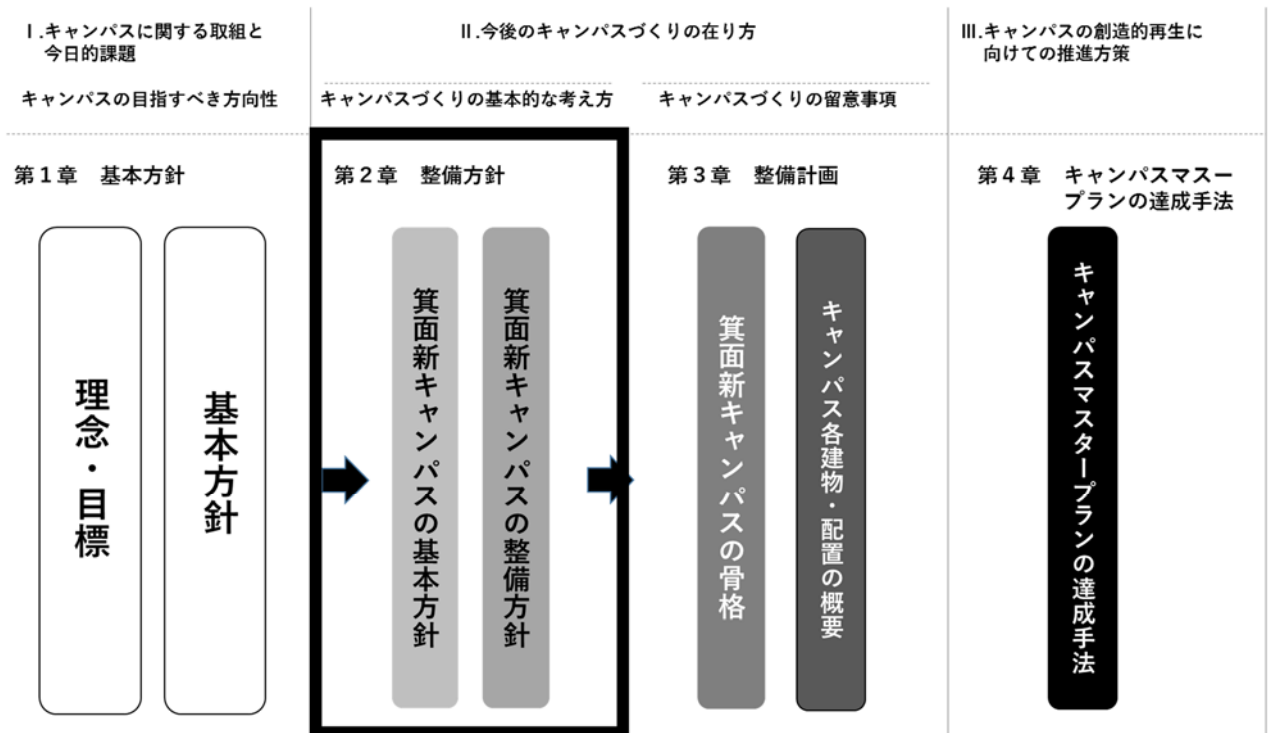
資源・歴史を継承し育てる、個性ある環境づくりを行う。

⑨ 安全・安心なキャンパスづくりの推進

防犯・災害対策の整った安全・安心のキャンパスづくりを行う。

第2章 箕面新キャンパスの整備・活用方針

第1章で述べた基本方針の実現のため、第2章ではキャンパスの個性と空間像から箕面新キャンパスにおける基本方針および整備・活用方針を示す。



2-1. 箕面新キャンパスの概要

箕面新キャンパスは、箕面市船場東の箕面船場駅前土地区画整理事業地区内に造成開発され、箕面市粟生間谷の現箕面キャンパス（2009年まで旧大阪外国語大学キャンパスであった）から、その中核である外国語学部と日本語日本文化教育センターの移転によって形成されるキャンパスである。豊中・吹田の両キャンパスの中間に位置し、中之島とのアクセスも良いため、本学の交流の新たな中心となる。

新キャンパスの敷地面積（本学所有）は約8,000㎡である。用途地域は商業地域であり、建築可能な延べ床面積は約48,000㎡（容積率：600%）である。外国語学部・言語文化研究科・日本語日本文化教育センターを合わせて、学生数は約3,000人（内留学生数約300人）が主にこのキャンパスで活動する予定である。なお全学の学生数は約23,000人（内留学生数約2,200人）。



図 2-1-a 大阪大学新箕面キャンパス配置図

2-2. 箕面新キャンパスと周辺街区等の概況

箕面新キャンパスは、箕面船場駅前土地区画整理事業地区（約4.4ha）の北端に位置し、南西端の駅昇降口からの動線は、デッキ（市施設である人工地盤。メインストリートに相当する）を通じて、本学の地上3階レベルにアクセスするものとなり、地上3階レベルを歩行者に対するキャンパスの正面玄関とする。（図2-2-a）



図2-2-a 大阪大学新箕面キャンパス配置図

キャンパスの北側と東側は公道に接道し、特に北側には、バスや駅の北側昇降口等からの動線に対する玄関口を設定する。南側は、3階レベルではメインストリートとスムーズに接続される広場空間（地区施設）として設定する（デッキの1Fレベルには市の駐輪場が計画されており、駅や駐輪場からの歩行者がデッキ下を通過して大学の1Fレベルにはアクセスできる動線も確保する）。西側は民間地権者施設と既存の集合住宅に面するが、上述の広場から、土地区画整理事業地区北側の（公道を挟む）街区へアクセスできるデッキ通路を地区施設として整備する（本学敷地

より北側へのアクセスは、民間地権者によって築造される予定)。

メインストリートの両サイドには、西側に民間地権者による商業施設と集合住宅の複合施設、東側に市の複合文化施設の計画が進められている。市の複合文化施設のうち、南半分は市民ホールとして民間事業者により運営される。北半分は、下層に図書館、上層に生涯学習施設が計画されており、図書館と生涯学習施設は、大阪大学が指定管理者制度によって運営を担う。

土地区画整理事業地区は箕面船場東地区全体（約73.0ha）の南端近くに位置し、船場東全体については、船場団地再整備マスタープラン（2012年）、箕面市立地適正化計画（2016年）によって、商業・業務機能を中心とする発展が期待されており、この土地区画整理事業地区には、その発展を牽引する役割が期待されている。

2-3. 整備方針

2-3-1. 箕面新キャンパスの個性と空間像

箕面新キャンパスは、旧大阪外国語大学の伝統を受け継ぎ、下記のような個性や空間像をもったキャンパスとする。

- 世界の言語と文化や社会に関する研究の集積拠点
- グローバル人材を育成する場
- 外国人留学生教育を通し世界に向けて日本語・日本文化を発信する拠点
- 外国語・外国学研究成果を介して交流できる地域と世界の接点としての空間性
- 阪大の主要3キャンパスの交流拠点としてのオープンな空間性

2-3-2. 箕面新キャンパスの整備方針

2-3-1.で述べた個性を活かし発展させていくために、箕面新キャンパスでは次の3つの基本方針に集約・整理し実現・発展させていく。この基本方針の実現に向け整備方針を定める。

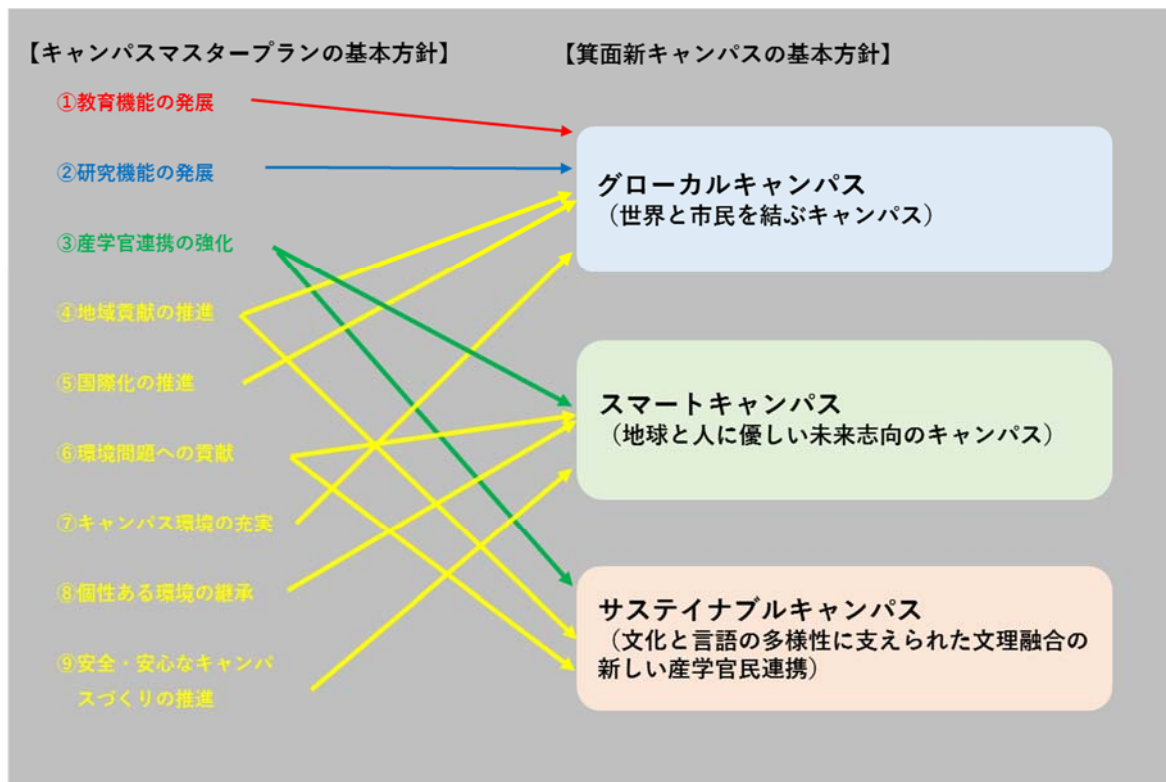


図 2-3-a 基本方針の関係性

箕面新キャンパスの基本方針

グローバル^{※1}キャンパス ～世界と市民を結ぶキャンパス～

●3 キャンパスの交流拠点

●世界の文化や言語の多様性の縮図となる

周辺地域との調和、市民との共生を実現しつつ、多言語・多文化共生を実現するキャンパスを形成し、3 キャンパスの交流拠点となる。

●日本の文化発信と世界中の人々の受け入れ・交流

都市型キャンパスの特性を活かして、市の文化交流施設やホールとの効率的共同利用を図り、世界と地域を結びつける多彩な文化活動を展開する。

- ・世界の言語や文化を紹介する多彩な行事(語劇祭や夏まつり)を市民に開放する。
- ・日本語日本文化教育センターの留学生と市民との交流により、日常の中での異文化理解を実現する。

●学生・研究者・企業の世界進出拠点、世界の多様な文化圏へのマーケティングに対する寄与

産学連携による技術研究のシーズ^{※2}を、多文化多言語にわたって実装していくためのベンチャー育成・実証フィールドとする。

- ・学生・教職員の活動拠点を形成するとともに、市民や海外の研究者等来学者との交流を通して、地域の活性化に貢献する。
- ・阪大生・企業・市民にとって世界進出への足掛かりとなる場にしていく。
- ・学生・企業・市民は「このキャンパスに集うこと」と「周辺のまちに出ること」が、留学や企業の海外進出のきっかけ、あるいは多様な文化に触れる機会となり、さらに世界の多様な文化に対応するマーケティングの機会ともなる。

〈整備方針〉

- **教育・研究機能の発展、国際化の推進**に寄与する外国語学部、言語文化研究科を主とした教育研究のための施設を整備する。
- **旧外国語大学からの個性の継承**としてグローバル人材を育成する場であり、外国語学部、言語文化研究科に加えて、外国人留学生教育を通し世界に向けて日本語・日本文化を発信する拠点である日本語日本文化教育センターを設置する。
- **キャンパス環境の充実・国際化の推進**に寄与する混住型の学寮を整備する。

※1 グローバル：グローバル(世界的な)とローカル(地域の)を合わせた造語。

※2 シーズ：実用化される前の段階の「種」となる技術やノウハウのこと。

スマートキャンパス ～地球と人に優しい未来志向のキャンパス～

● 生きた実験室“リビングラボ”での ICT 活用※3

キャンパスそのものが新しい技術や社会システム等を実践の中で試行していくことができ、生きた実験場となる。また、最先端の学習支援環境を構築していく。

● 情報、エネルギー利用、モビリティ(交通)等のスマート化※4

公共交通の便利な立地特性を生かし、車に頼らず歩行者に優しいキャンパスを構築する。

● 地域特性と不動産ストックを最大限に活用

箕面新キャンパスを中心としつつ、周辺市街地の既存建物や民間施設、市の文化施設を活用し、周辺地域の発展にも寄与するような、教育・研究・社会貢献のプログラムを展開していくことが望まれる。

- ・ キャンパス環境の充実のため、箕面市の施設等の周辺施設の活用や、交流スペース・カフェ等の整備を行う。
- ・ 動線を整理し、わかりやすく安全な交通経路を確保する。
- ・ キャンパス内への車両の入構を規制し、安全・安心なキャンパスづくりを推進する。



〈整備方針〉

- センシング技術・ICT 技術を用い、**研究のフィールド（生きた実験場）**・**最先端の学習支援環境**を構築する。
- **キャンパス環境の充実**のため、箕面市の施設等の周辺施設の活用や、交流スペース・カフェ等の整備を行う。
- 動線を整理し、わかりやすく安全な交通経路を確保する。
- キャンパス内への自動車の入構を規制し、**安全・安心なキャンパス**づくりを推進する。
- 環境制御等による省エネルギーの推進、**環境問題への配慮**を行う。

※3 リビングラボ・ICT：リビングラボとは、理系の実験はもちろん社会実験まで含めて、キャンパスは生きた実験場であるという考え方。ICTは「情報通信技術」の略語。

※4 スマート化：ICT 技術の活用により、交通やエネルギー、照明や空調などの様々なシステムについて、効率的かつ洗練された運用ができるようにすること。

サステイナブルキャンパス^{※4} ～文化と言語の多様性に支えられた文理融合の新しい産学官民連携～

●生活スタイルの多様性

地球環境とサステイナビリティに配慮し、省エネ・省資源・廃棄物低減を推進しつつ、低炭素化社会に向けて、市施設や周辺民間施設との相互利用や共用化を図るキャンパスを目指す。

●人材育成、インターンシップ、生涯学習のフィールド

留学生を含め多くの学生が、インターンシップ等を通じてまちに関わり成長しながら、街の発展にも貢献できるキャンパスとし、25言語にわたって展開できる多文化多言語の研修や人材育成のプログラムを推進する。

●公共的スペースの幅広い使い方を可能にするエリアマネジメント^{※5}による広域的な連携

エリアマネジメントの手法を取り入れ、屋外スペースや市の複合施設とも一体的に使われる、市民にも聞かれたキャンパスとする

- ・学生(外国人/日本人)や研究者(大学/企業)、市民の交流を育む多文化多言語交流のエリアマネジメントの実施による新キャンパスと既存市街地のゆるやかな連携による発展。
- ・キャンパスの整備と運営や維持管理においても周辺関係者と幅広い連携をすることで、環境・経済面での効率を高め、持続性の高いキャンパス経営を実現する。
- ・大学と地域の双方にとって、災害発生時には一定の機能を果たすことができるキャンパスを形成する。
- ・箕面市の施設等の周辺施設や交流スペース・カフェ等を活かし、『世界の縮図』を新船場に創出することにより、周辺地域の発展に貢献できると想定される。(右のイメージ図)



〈整備方針〉

- **環境問題への貢献**のため、環境制御等の設備計画等による省エネルギーを推進する。
- **産学官連携の強化**のための共同研究スペースを確保する。
- **地域との交流**を推進する地区施設の整備を行う。

※4 サステイナブル：[持続可能な]の意味であるが、省エネ・省資源にとどまらず社会との関係や経済、経営、防災等を含めた幅広い意味での持続可能性として捉えている。

※5 国交省の定義によると「地域における良好な環境や地域の価値を維持・向上させるための、住民・事業主・地権者等による主体的な取り組み」のこと。市、大学、組合、市民等が連合して作りあげていかなければならない。

2-4. 多様な整備手法の活用と施設の有効活用

箕面新キャンパスは、民間資金の活用（PFI事業）や土地処分収入、寄付等によって大学が整備する施設と、市が建築し大学が運用する施設とが、全体としてキャンパスとしての機能を形成するという意味で、非常に先進的な取り組みである。

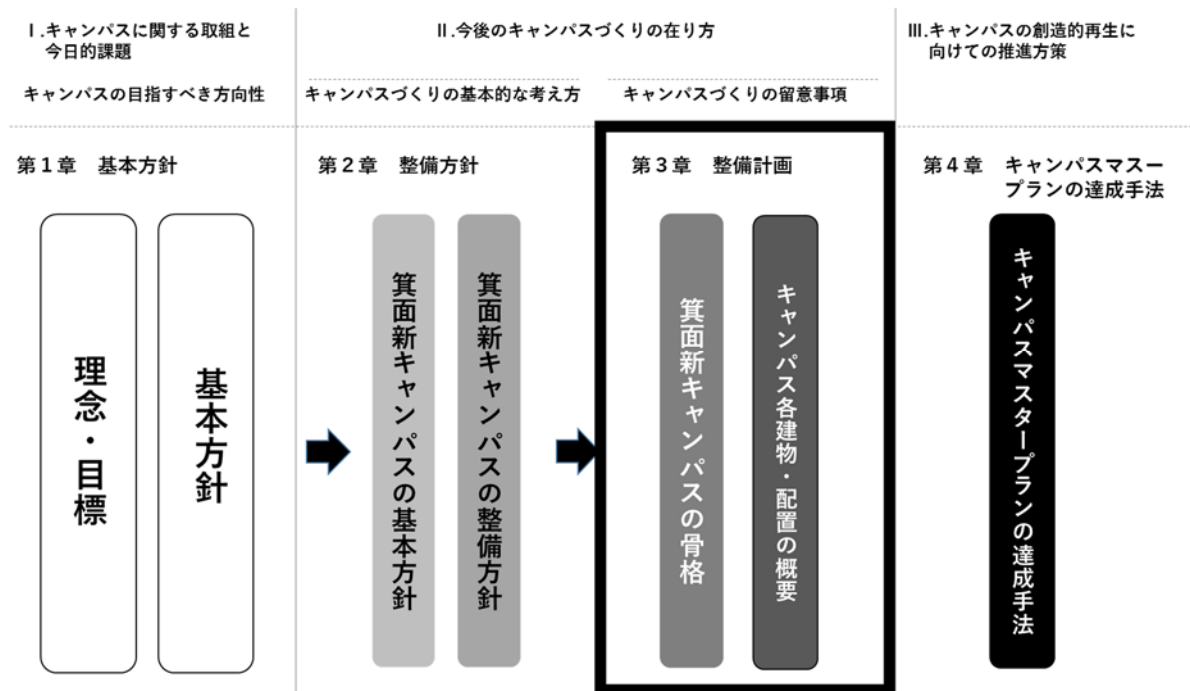
運用開始後は、点検等により施設の利用状況を把握しつつ、施設の有効活用に取り組んでいく。

なお、詳細の活用方針・計画は付属資料の箕面新キャンパス活用計画に記載する。

第3章 箕面新キャンパスの整備手法

キャンパスの骨格を形成する箕面新キャンパスの個性と空間像を活かし発展させていくため、第3章ではゾーニング計画、屋外空間利用、建物配置、サステイナブルな環境・建築、インストラクチャーの考え方をそれぞれ定める。

また、上述の骨格を踏まえ、箕面新キャンパスの整備計画について定める。



3-1. 箕面新キャンパスの骨格の形成

3-1-1. ゾーニング等の空間構成

グローバルキャンパスを推進する世界と市民をつなぐゾーニング・配置の設定、サステイナブルキャンパスを推進する将来需要や長期的視点による有効かつ戦略的な敷地の活用について検討した。

① 敷地の使い方（ゾーニング・配置・規模等の設定→ 関連；2-2）

- ・前章 2-1 で述べた敷地規模と学生数、ならびに、グローバルビレッジ構想により、新キャンパスにおける本学所有の敷地計 8,000 m²を、教育研究施設用地 6,000 m²（西側）および混住型の学寮用地 2,000 m²（東側）として計画する。用途地域は商業地域であり建築可能な延べ床面積は 48,000 m²（容積率：600%）である。教育研究施設用地では容積率を約 400%と想定して施設を計画しており、将来の増床にも対応可能としている。教育研究のための施設は 1 棟に集約して配置し、限られた敷地を有効に活用する計画とする。
- ・キャンパス内の教育研究施設とあわせて、箕面市の図書館・生涯学習施設を活用し教育・研究活動に有効な連携を図るため、箕面市の施設側に開いたゾーニングおよび立体構成とする。
- ・世界と市民をつなぐグローバルキャンパスとして、多言語・多文化共生を実現する拠点となる教育研究施設を大学の顔として、また土地区画整理事業地区の中心的な施設として、市のデッキ（人工地盤）からみてアイストップになるように配置する。
- ・阪大の交流拠点、また土地区画整理事業地区の交流拠点として、市の図書館・生涯学習施設と教育研究施設との間の部分（市のデッキ・人工地盤のメインストリートの北端部）に「阪大広場」を、地区施設として整備する。なお阪大広場は、市が構築するデッキと大学が構築するデッキが境目なく運用できる計画とする。

② 将来需要や長期的視点による有効かつ戦略的な敷地の活用

- ・本学が指定管理者として箕面市の図書館・生涯学習施設を運用・活用していくことで、長期に亘って質の高い施設・環境を担保する。
- ・公共的スペースの幅広い使い方を可能にするエリアマネジメントの手法を取り入れ、屋外スペースや市の複合施設を一体的に長期的に管理・運営し、市民にも開かれたキャンパスとする。
- ・教育研究ゾーンと学寮ゾーンの間には箕面新キャンパスの象徴としてシンボル広場を計画し、将来のエクステンション用地としても利用できる計画とする。
- ・限られた敷地の中で、将来需要や長期的な視点から、ピロティ空間を計画し、将来増床スペースとして適切に設定する。

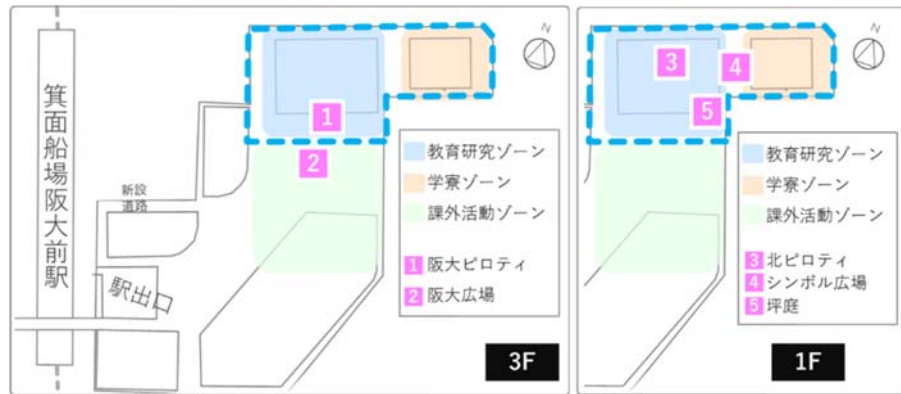


図 3-1-a 大阪大学箕面新キャンパスのゾーニング・パブリックスペース計画（関連；3-1-1, 3-1-2）

3-1-2. パブリックスペース計画

「オープン」であり続けることがサステイナブルキャンパスとして持続的な発展とグローバルキャンパスとして周辺地域との調和・市民との共生・多言語・多文化共生の実現を支えたととらえ、「オープン」を空間設計のテーマとする。

① 環境と調和する質の高いパブリックスペースづくり

- ・ 阪大ピロティとして、阪大広場と連続する多目的スペースを整備する。教育研究施設3階のエントランスは、このピロティ内の正面に配置する。また、大学らしい風格をつくりだす北ピロティを、北側公道からの後退と一体的なゆとりをもって配置する。教育研究施設の1階のエントランスはこの北ピロティの正面に配置する。
- ・ 阪大広場を教育研究施設、箕面市文化施設、民間地権者施設の中間に配置する（3-1-1 参照）。旧大阪外国語大学時代から箕面キャンパスの伝統である夏祭りの新たな会場にもなる。
- ・ キャンパス北側には、箕面新キャンパスのシンボルとなる並木道を整備する。また、隣地との緩衝帯となる常緑樹群・生垣を整備する。

② 広場、モール、緑などの空間構成要素

- ・ 阪大広場（3-1-1、2-2 参照）は、主要な動線上に位置するため、箕面キャンパスの伝統を受け継ぐイベント会場としての活用や、阪大ピロティと連続した空間として活用する。
- ・ シンボル広場として、教育研究施設と学寮の間に広場を計画する。箕面新キャンパスの日常の憩いの場となるとともに交流の場となる。また、イベント活動の会場として利用可能な計画とする。
- ・ 箕面市駐輪場とつながる通り抜け歩道の正面にシンボルツリーを配置する。さらに大阪外国語大学記念ホールのための鑑賞庭として、坪庭を整備する。キャンパス内は積極的に緑化を行いゆとりと潤いのあるキャンパスの形成に貢献する。下位指針である緑のフレームワークプランに基づき維持管理を継続的に行い、長期的な視点で施設環境を整備する。

③多様な利用者のためのユニバーサルデザイン

- ・25カ国の言語・文化を扱う学舎・学寮にふさわしい施設として、文化・言語・国籍の違い、老若男女といった差異、障がい・能力の如何に問わずに利用することができる施設とする。
- ・大阪大学S O G I基本方針※「誰もがそれぞれの性的指向・性自認をもっている」という考えに基づき、建物利用者の多様な意思と選択の自由が尊重され、その個性と能力が存分に発揮される建物整備に取り組む。具体例として、車いすエリアを想定した階段教室・階段、スロープへの手すりの設置・各階に設けた多目的便所などを整備する。

※：大阪大学「性的指向(Sexual Orientation)」と「性自認(Gender Identity)」の多様性に関する基本方針

3-1-3. 交通と動線の考え方（関連；2-2）

車両動線は地上レベルに、歩行者動線はデッキレベルに設定するなど、動線を整理しわかりやすく安全な交通経路を確保する地球と人に優しい未来志向のスマートキャンパスを推進する。

① 安心で快適な移動空間づくり

- ・学生・教職員・地域の人々など、様々な人の動きに対応する歩行者用デッキを箕面市側のデッキ計画と協調して確保する。（関連；2-2）
- ・歩行者の主要動線を駅からのデッキ通路とし、車両の主要動線をキャンパス北側とし、それぞれが象徴的な景観となるようにする。（→関連；3-1-2）
- ・安心安全な移動空間とするため、歩行者の動線と車両動線を明確に分離する。

② キャンパス内の考え方

- ・キャンパスの出入口は、車両用は公道に面して設け、歩行者用は駅からのデッキ通路に面して設けることでキャンパスを訪れる人々にとってわかりやすく目的の建物へアクセスしやすい動線とする。
- ・建物相互間の利用を促進するため、教育研究のための施設と箕面市の施設との間の移動に欠かせない歩廊を整備する。
- ・周辺の交通渋滞防止・敷地の有効活用及びCO₂排出低減の観点から、学内者による車両での通勤・通学を禁止し、バリアフリーへの対応や来訪者・搬入用に供する最低限の駐車場計画とする。
- ・学内者への自動車・自転車利用の規制や歩車の明確な分離によって、安全安心な動線とする。
- ・現箕面キャンパスの駐車・駐輪需要を調査した上で、都市型としての新キャンパスの駐車・駐輪台数の検討を行い、効率の良い台数設定とする。

③キャンパス間の移動や通学・通勤環境

- ・環境に優しいキャンパスの移動環境として、都市型キャンパスの利点を活かし、自家用車での通勤・通学を全面的に禁止する。
- ・現在運用している学内（キャンパス間）連絡バスについて、新キャンパス整備に適合する、新たな運用形態を検討・計画する。

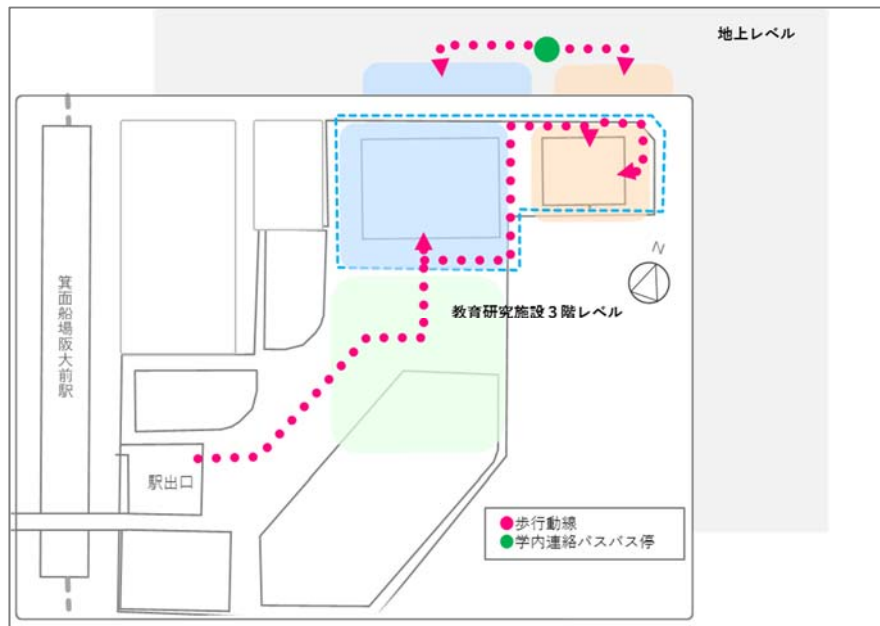


図 3-1-3-a 大阪大学箕面新キャンパス 動線計画

3-1-4. 景観の形成および建物等の配置関係

調和の取れた景観の形成・施設配置とし、屋外スペースや市の複合施設とも一体的に使われる、市民にも聞かれたサステイナブルキャンパスを推進する。

① 調和の取れた景観の形成

- ・キャンパス移転・新駅設置に伴うキャンパス周辺の街の再整備では、周辺の土地所有者等の意見交換の場である「大阪大学・箕面市等連絡協議会」において景観デザイン指針（素案）が検討されている。この素案に基づき箕面市により策定された景観デザイン指針に準拠した、キャンパスの周辺含めた調和の取れた景観形成を目指す。
- ・敷地北辺では、建物を敷地境界からゆとりをもってセットバックして配慮し、市の歩道とも連続するイチョウ並木の歩道として、アカデミックなイメージをもつ景観を形成する。
- ・シンボル広場（3-1-2）を整備し、夏祭り等イベント時のテント配置が可能な緑地とする。
- ・本キャンパスは、商業・業務系地域における駅前の都市型キャンパスであり、集合住宅も隣接する。箕面市の景観指針にも準拠した配置・景観形成を行い、隣地・周辺との調和を図る並木等を整備する。（関連②）

- ・箕面市の施設として、大学と市民が共同で使用する図書館や課外活動にも利用できる生涯学習施設が、市の文化施設として計画されており、本学が指定管理者制度により将来にわたって運営業務・維持管理を受託する。これらの施設全体が交流の機能として、活動の表出となり景観形成にも寄与する。

② 利便性と機能性を向上させる施設配置

- ・教育・研究のためのスペースは（図書館等、一部をのぞき）、1棟の施設に集約して配置する。
- ・建物の改築等を見越して、シンボル広場を将来のエクステンション用地としても位置づける。
- ・箕面新キャンパスの象徴として、教育研究のための施設と混住型の学寮の間にシンボル広場配置することで、日常の憩いの場となるだけでなく、人と人との多様な交流が生まれる場所とする。
- ・都市型キャンパスとして、また3キャンパス（箕面・豊中・吹田）の交流の中心となる計画を行うことで、全学での共同での利用が可能な施設は相互に利用する。

3-1-5. 持続可能性の視点からのインフラストラクチャーに対する考え方

キャンパスそのものが新しい技術や社会システム等を実践の中で試行していくことができる、生きた実験場となり、省エネルギーの推進や環境負荷低減に貢献するなどスマートキャンパス、サステイナブルキャンパスを推進する。

① キャンパス環境の持続的発展を図る仕組みづくり

- ・先進的な環境建築デザインの実践が箕面新キャンパスのブランド力を高め、強い発信力を育む。企業誘致、魅力ある店舗誘致、グローバルなイベントや会議の開催にも寄与する「産学官+市民の共創」を推進する。
- ・街区でL E E D-ND、教育研究施設ではL E E D-NC取得を目指すことで、世界的な基準に基づいたサステイナブルなキャンパスとする。
- ・民間企業との共同研究等により、環境制御の設備計画において各種先端技術の実証実験を実施することが計画されており、省エネルギーの推進や環境負荷低減に貢献する。

②サステイナブルな環境のための計画づくり

- ・キャンパス内は、イチョウ並木やシンボル広場、坪庭など、積極的に緑化を行うことでヒートアイランド対策に寄与する緑地帯の確保を推進する。
- ・大学としてまとめた緑の整備と維持管理の方針である「緑のフレームワークプラン」に基づき、景観形成の統一的な考え方の周知及び適切な維持管理を実施する。

③ サステイナブルな建築のための計画づくり

- ・施設のスペースマネジメントによる効率的な施設運用を行うことを前提とした建築計画とする。
- ・キャンパスにおける新たな施設の建築や再配置の際に必要なエクステンションを設け、持続性に配慮した配置や形態としている。
- ・多様な手法を採用して、環境配慮を積極的に行う。(図 3-1-5-a)
- ・サステナビリティに関する基本的な方針として、環境負荷低減を促進するため、トップダウンによるマネジメント体制の構築に伴い策定した「低炭素・省エネルギーへの取組みにおける基本計画」に基づき「環境キャンパス」の実現を推進する。

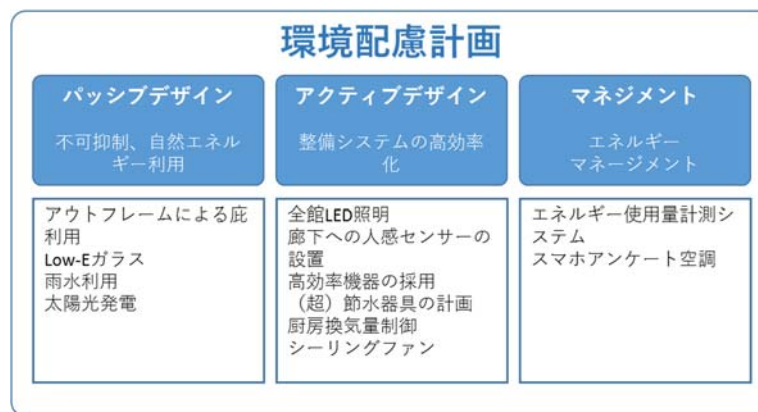


図 3-1-5-a 箕面新キャンパスの環境配慮計画 (例)

④ キャンパスのエネルギー需要を考慮した計画づくり

- ・文系のキャンパスであることから、イニシャルコスト・ランニングコストを考慮し、分散的な熱源・設備方式とする等、バランスよく効率的なシステムを計画する。
- ・エネルギー供給の計画に当っては小規模なキャンパスである為、エネルギー供給・処理施設は設置せず直接外部から引き込みを検討するとともに、太陽光発電設備を活用する等自然エネルギーの有効利用を検討する。

⑤ 柔軟性を持つインフラストラクチャー計画

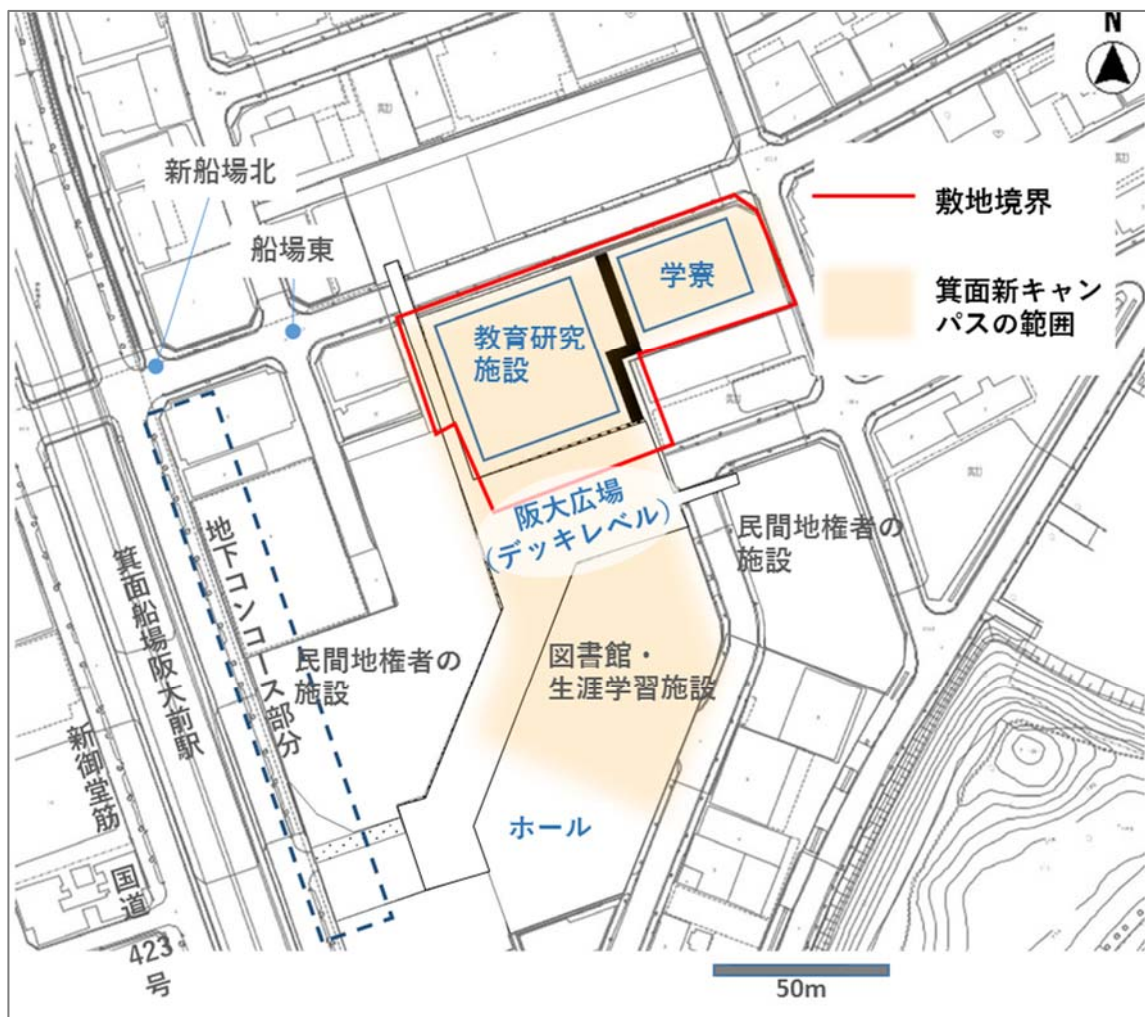
- ・将来の規模拡張、用途変更、設備の入れ替え、増設等に柔軟に対応できるスペースを確保する。

⑥ 効果的、効率的な維持管理と運用

- ・外部引き込み配管は予備を設けるなど、将来のケーブル引き替えに柔軟に対応できる計画とする。
- ・教育研究施設側は、将来の運用のフィードバックができるフロア毎のエネルギー計測を計画する。また、教育研究施設は、将来の運用や更新にフィードバックしやすいように、フロア毎のエネルギー計測や、監視ができる計画とする。

3-2. 箕面新キャンパスの各棟の整備

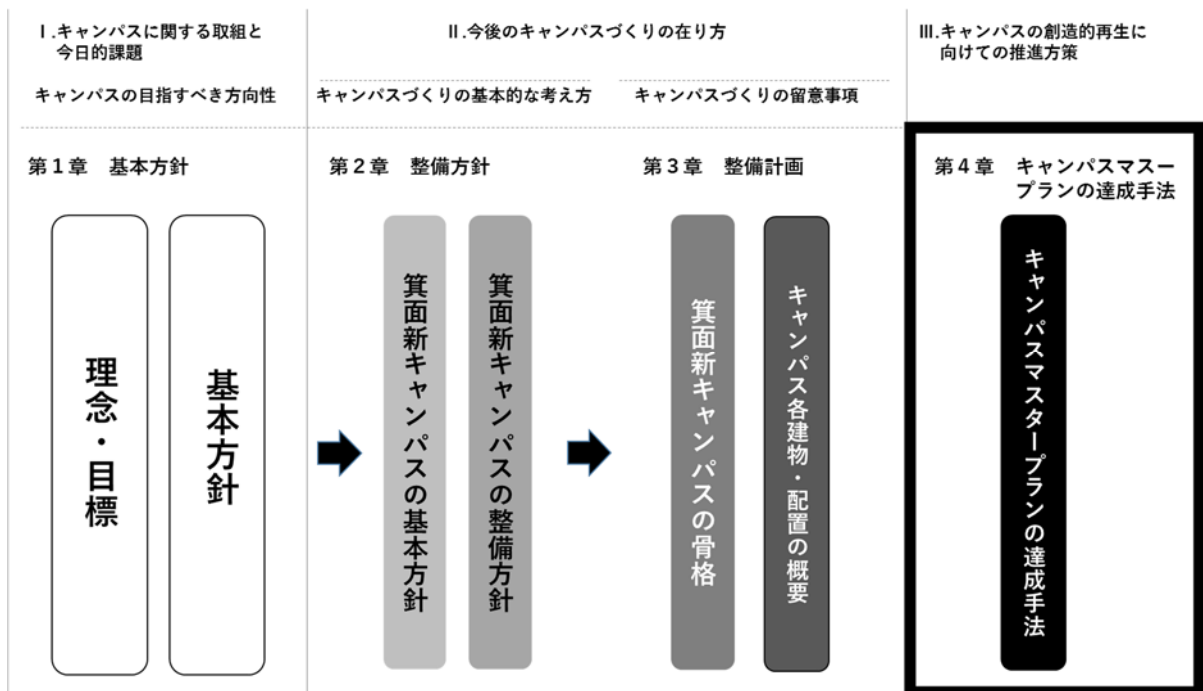
- ・箕面新キャンパスは、教育研究施設・学寮・図書館（箕面市整備）・阪大広場を主な施設として構成する。
- ・教育研究施設は、外国語学部・言語文化研究科・日本語日本文化教育センターが主に運用し、箕面新キャンパスの教育研究の拠点としてキャンパスの正面に計画する。
- ・学寮は、日本人学生・留学生の混住型の施設である。教育研究施設の東に設け人々の多様な交流を創出する。
- ・図書館は、箕面市が建築する施設である。大学図書館と市民図書館の機能をあわせ持ち、大学が指定管理者となって運営する。
- ・阪大広場はキャンパスの中心に設けることで、各施設をつなぎ多様な交流を促す場所とする。



(図 3-2-a 箕面新キャンパスの主要施設の配置図)

第4章 キャンパスマスタープランの達成手法

キャンパスマスタープランの達成に向けて、第4章では達成手法について示す。



4-1. キャンパスマスタープランの達成に向けた方策

4-1-1. キャンパス整備の対象と経費

キャンパスの施設・環境整備の対象、およびその維持管理等については以下のとおりである。

- (1) 教育研究の拡充や新たな展開にともなって必要とされる施設の整備
- (2) 教育・研究・生活環境の向上および国際交流の支援に必要とされる施設の整備
- (3) 老朽化した施設の計画的な改善および施設の定期的な維持管理・補修等の実施
- (4) 屋外の公共的な空間、広場、緑地等の整備・利用・管理の実施
- (5) 駐車場・駐輪場、構内道路等の交通施設の整備および管理

これらの施設整備や環境整備を実施する経費の財源等を整理すると以下のようなになる。

- (a) 国への概算要求に基づいた予算（施設整備補助金、施設費交付金、施設費貸付金）
- (b) 学内配分における予算の確保（総長裁量経費、教育研究等重点推進経費）
- (c) 民間の活力等（資金、提案力、機動性）を活用する方法
- (d) 寄付等による方法
- (e) 奉仕活動的な内部マンパワーの活用による方法
- (f) キャンパス移転に伴う土地処分収入等による予算の確保

今回の新キャンパス整備は、土地処分収入及び民間の活力の活用、寄付、箕面市の施設の活用等多様な財源により行うこととした。今後の施設関係の予算的措置は競争的になり、厳しいものとなると思われる。このため、必要最小限の経費により最大の効果を生み出すことがますます求められてゆく。その実現には、キャンパスマスタープランの考え方が、構成員に共有されていくことが一層重要となる。

4-1-2. キャンパスマスタープランの達成手法

1章の目標を実現していくために、キャンパスにおける整備対象について共用性の高い施設や空間に重点を置きながら施設整備を行う。

箕面新キャンパスは都市型キャンパスであり、教育研究施設・学寮・図書館（箕面市整備）・阪大広場を主な施設として構成しているが、共用性の高い施設や空間をできるだけ取り込みながら、整備を行う。

キャンパスマスタープランを実現していくために、詳細の整備行動計画を別途まとめ、毎年度見直しながら事業の優先度に応じて大学として重点的・計画的に整備を行う。

事業の実施には、4-1-1節の財源の確保や施設マネジメントの一層の推進により、整備後の管理運営も含め総合的な検討を行う。

4-2. キャンパスマスタープランの達成のプロセスと要点

個々の建物等の整備行動計画の構想から設計に至る過程は、下図のプロセスによって、キャンパスマスタープランとの整合を確認していく。

特に予算要求や寄付受入の方針が決定する前に、キャンパス全体としての空間骨格との整合の視点、駐車場や緑地、ランニングコストを低減するための考え方を事前に整理しておくことが重要である。さらに基本設計完了後（およそシングルラインのプランができた時点）、実施設計を開始する前にサステイナブルキャンパスオフィス運営会議において設計の方向性を確認し、施設マネジメント委員会で報告する。

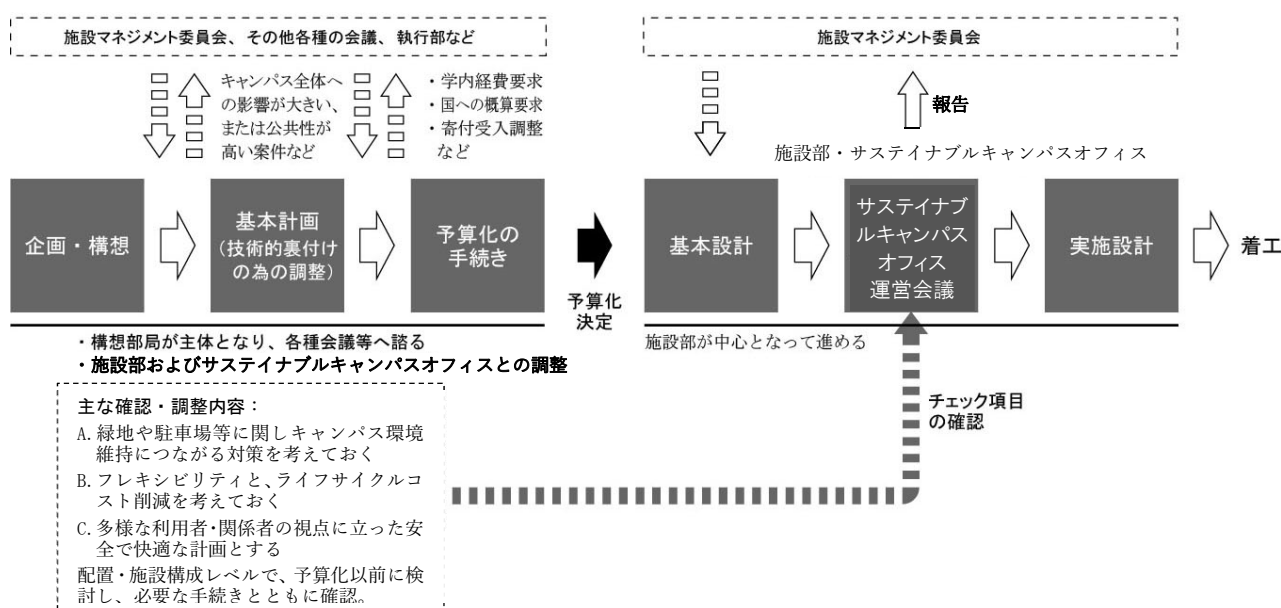


図 4-2-a 企画から設計までのプロセスイメージ

4-3. キャンパスマスタープランの発展的マネジメント

本学のキャンパス計画や施設マネジメントは（図4-3-a）のPDCAサイクルによるキャンパスマスタープランの運用と更新の流れに沿って、実施していくものとする。

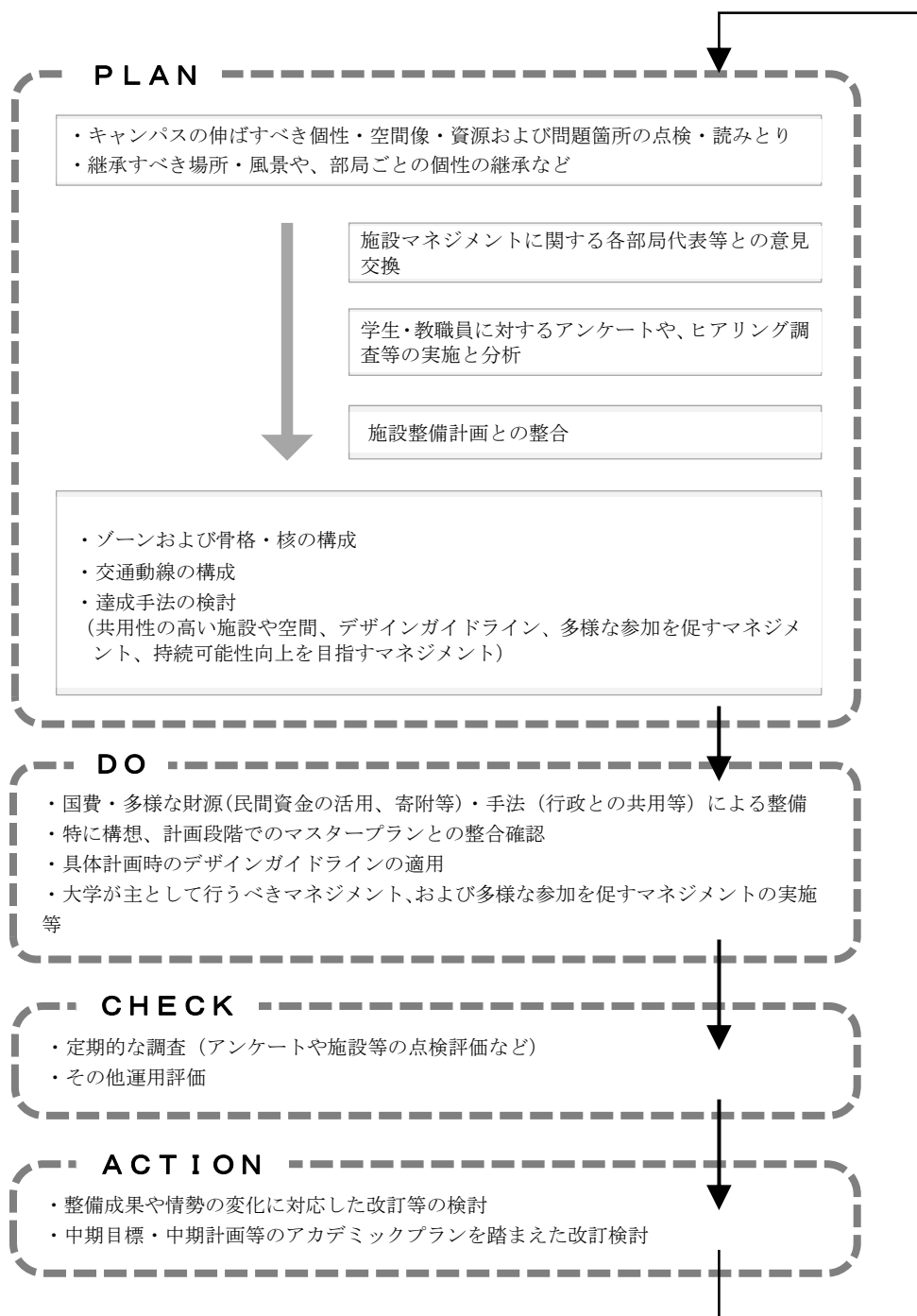


図4-3-a キャンパスマスタープランにおけるPDCAサイクル

箕面新キャンパスマスタープランマスタープラン

企画・編集：

大阪大学 施設マネジメント委員会

サステイナブルキャンパスオフィス

施設部企画課